



ひこねじょうはくぶつかん
彦根城博物館

井伊家のふるさと

井伊家のふるさと 井伊谷

井伊直政が生まれたのは、井伊谷(現在の静岡県浜松市)です。むかしの地名は遠江国引佐郡井伊谷と言います。ここには、井伊家の先祖代々が住んでいました。「井伊」という名前は、「井伊谷」という地名がもとになっています。



伝説の先祖一井戸の中からあらわれた子ども

井伊家の先祖をさかのぼると、約1000年前の井伊共保という人物にたどりつけます。共保には次のような伝説があります。

一正月の朝、井伊谷の八幡宮の神主が井戸の中に赤ん坊がいるのを見つけます。これを聞いた国司(京都から来ていた役人)がこの子を育てたところ、成長して共保と名乗り、地域をおさめる強い武士となりました。

このような伝説がうまれたのは、古い時代から井伊谷に強い武士がいたからでしょう。

1010年の正月、井伊谷八幡宮の井戸



戦国時代の井伊家

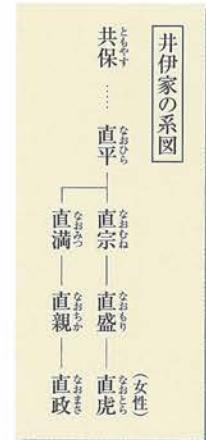
井伊一族の活躍

約500年前、井伊谷をおさめていたのは井伊直平です。隣の駿河国(静岡県中東部)をおさめる戦国大名の今川氏が強い力を持っていましたため、直平は今川氏にしたがっていました。

桶狭間の戦い

織田信長が今川義元に勝った桶狭間の戦い(1560年)。井伊家の人々もこの戦いにかかわっています。

このころ井伊家の当主だった直盛は、今川義元の命令で、今川軍の先頭に立って織田信長の領地に入っていました。桶狭間で休んでいたところ、信長から突然攻められて、今川義元は討ち取られ、井伊直盛もここで討ち死にしました。



井伊家の人々は、当主が突然殺されて、強いショックを受けました。次の当主には、井伊直親がつきました。直親は、井伊直政の父です。

桶狭間の戦いのあと、それまで今川氏にしたがっていた人々が離れはじめます。次に井伊家も裏切るのではないかとうわさが出ます。そこで、直親は説明するため、今川氏のもとへ向かいました。しかし、向かう途中で、今川方の武士に殺されてしまいました。

井伊直政のおいたち

かくれてくらした子どものころ

井伊直親が殺されたとき、その子どもの直政はまだ1歳でした。今川氏では、直親について直政も殺してしまおうと考えました。そこで、井伊家の人は直政を親せきの家やお寺に預けます。おさない直政は、隠れるように育てられたのでした。

そのころの井伊谷

井伊家では、当主が次々と死んでしまったため、直政がおとなになるまでの間、井伊直盛の娘が「直虎」と名乗って、井伊家の当主になり、家を守っていました。まわりの地域では、今川氏の勢力が弱まっています。それをねらって、となりの三河国（愛知県）の徳川家康が、井伊谷のある遠江国に勢力をひろげてきました。

徳川家康の家臣となる

直政が15歳になると、井伊家の人々は、直政を大名の家臣にして、りっぱな武士にしようと考えます。そのころ、井伊谷のまわりでは徳川家康の勢力が強かつたため、家康の家臣になりました。



大将となった直政



井伊直政

家康から付けられた家来たち

直政はかくれるように暮らしていたため、家来はほとんどいませんでした。そこで家康は、自分の家臣の中から直政を助ける家来を選びました。また、そのころ新しく領地とした甲斐（山梨県）・信濃（長野県）の武士たちも直政の家来にしました。彼らは、もとは武田信玄の家来で、武田家がほろびた後、家康にしたがうよう説得したのが直政でした。家康のおかげで、直政は多くの家来を引き連れて戦う「侍大将」となったのです。

にがい思い出ーはじめての大将

直政が侍大将としてはじめて戦ったのは、小牧・長久手の戦い（1584年）です。この時、直政がひきいる部隊は大躍進し、「井伊の赤鬼」というあだ名がつけられました。戦いの最中、直政が敵と戦っていると、家康の家臣がやって来て、直政に言います。

一大将は全体を見るのが役割だから、家来のように前に出て戦ってはいけないー

直政の振る舞いは大将のすることではなかったので、注意されてしまったのです。まわりの人から教えてもらつて成長していった直政でした。



長久手合戦で敵と戦う直政
小牧長久手合戦図屏風
(大阪城天守閣所蔵)より

あか ぞな 井伊の赤備え



井伊隊の旗
朱色の布地に「井」をデザインした家紋が入ります

赤備えの甲冑 直政が使ったと伝えます

「赤備え」の集団

直政と家来たちは、戦うとき、甲冑など身につけるものを朱色にそろえました。この姿は「井伊の赤備え」と呼ばれました。朱色にまとめることで集団がすぐにわかり、赤い色の人々がせまると敵がおそれるねらいがあつたと言われています。

「赤備え」は、もともと武田信玄の家来たちがしていました。武田家にはすぐれた戦い方が伝わっていたので、徳川家康は、それを知る武士を直政のもとに集めて、井伊家にも武田のようにすぐれた戦い方をさせよう考えたのでした。

かつ やく 直政の活躍

家臣のトップとなる

1590年、徳川家康が江戸(今の東京)へ移ったとき、直政は箕輪(群馬県)に新しい領地12万石をもらいました。これは、家康の家臣の中でいちばん多い領地です。これほど出世したのは、主人の徳川家康のほかに、豊臣秀吉の考えもあったようです。

家康よ。直政はすばらしき若者だ。たくさんの領地をやつてくれ。



豊臣秀吉
(大阪城天守閣所蔵)



直政が豊臣秀吉からもらった手紙
箕輪をしっかりと治めるようにという内容。秀吉にとって直政は家来(家康)のさらに家来にあたります。秀吉がこのような相手に手紙を出すことはほとんどなく、貴重な1通です。

家康の天下取りを助ける

豊臣秀吉が亡くなると、その家臣だった大名たちが対立するようになります。石田三成たちと黒田長政たちです。徳川家康は黒田たちとなかよくしようと考えました。この時、直政と黒田が何回も話をして、信頼しあう仲になりました。



大名たちの対立が深まってゆき、ついに関ヶ原で戦うことになりました。直政は、黒田を通じて、多くの大名に家康へ味方するようはたらきかけます。家康が勝利できた理由の一つに、直政ががんばって多くの味方を集めたことがありました。

せき が はら かつ せん
関ヶ原の合戦



はたじるし せんじょう
旗印は戦場でのめじるし。合戦を描いたこの絵で、旗印をもとに武将をさがしてみよう。



西軍から東軍へ



大谷吉継



宇喜多秀家



島津義弘



小西行長



石田三成



西軍



福島正則



黒田長政



本多忠勝



(直政本人の横に立てる)



井伊直政



徳川家康



東西両軍の旗印

せき が はら かつせん ず
関ヶ原合戦図

彦根にやってきた井伊家



関ヶ原の合戦に勝利

直政は関ヶ原の合戦で活躍したので、ほうびとして、佐和山城と彦根のまわりの土地をもらいました。彦根にやってきた直政は、ここに新しい町をつくろうと考えました。

直政には、もう一つ大きな仕事がありました。合戦で負けた相手との話し合いです。しかし、直政は関ヶ原合戦のとき、敵を追いかけて鉄砲を打たれていました。その後も多くの仕事をして、傷がひどくなつたようです。そのため、合戦が終わって1年半たつたころ、佐和山城で亡くなつてしましました。直政は、死ぬ直前まで、國の行く末と彦根地域の将来のことを考えていたお殿様でした。

彦根城ができる前のように

彦根城ができる前、この地域のお城は佐和山にありました。彦根山の上にはお寺が建ち、そのまわりには田畠が広がっていました。

佐和山城にやってきた直政は、別の場所に新しいお城を建て、まわりに家来や商人・職人の住む町をつくろうと考えました。直政が生きている間には、この計画は進みませんでしたが、直政の死後、彦根山にお城を建てることが決まりました。



直政のあとをついだ直孝



井伊直孝（彦根・清涼寺所蔵）

直孝のおいたち

井伊直孝は、1590年、今の静岡県焼津市に生まれました。父は井伊直政です。

直孝には兄の直継があり、直政の次には直継が井伊家の当主になると考えられています。ところが、1614年、徳川家康が大坂城の豊臣秀頼を攻めることになりました(大坂冬の陣)。このとき家康は、直孝に井伊家の軍勢をひきいる大将となるよう命令しました。直継は体が弱く、大将をつとめるのはむづかしかったようです。

直孝は、みごとに侍大将の役目を果たします。これを見た家康は、直孝が直政のあとを継ぐようにと命じました。



井伊直孝

さい ご たたか おお さか なつ じん 最後の戦いー大坂夏の陣



大坂夏の陣図 若江で井伊隊が活躍したようすを描きます

かつ やく 大坂夏の陣で活躍

なつ じん
続く大坂夏の陣(1615年)でも、井伊直孝ひきいる部隊は活躍します。
わかえ おおさか ふひがいおおさかし とよみ ひより き むらしげなり たいせん しょう
若江(今の大坂府東大阪市)で豊臣秀頼の家臣の木村重成隊と対戦し、勝利しました。

てつぽう
また、井伊家の部隊は、強力な鉄砲をそろえていました。大坂城に立てこもる秀頼たちに向けて鉄砲をうち込み、降参へ追い込みました。
この戦いを最後に、戦争のない時代を迎えることとなります。



そあんじ た
宗安寺に建つ
木村重成首塚
敵だった重成を供養
するため建てました



彦根のまちづくり

平和な時代のまちづくり

彦根城は、1604年から1607年ころの工事で、天守とそのまわりだけができていました。

大坂夏の陣が終わった後、直孝は彦根のまちづくりに取りかかります。直孝みずから現場で指示を出して大がかりな工事をすすめ、
おうみのくに
1622年ころまでに、近江国(今の滋賀県)の中
でいちばん大きな町ができあがりました。



ひこ おじょうか まちざんたい ず
彦根城下町全体の図

やく わり 彦根の役割

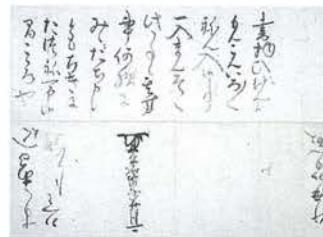
にし に ほん きょうと ほうめん え ど かんとう なかせんどう
彦根市内には、西日本や京都方面から江戸・関東方面へ行く人が通る道(中山道)が通っていました。井伊家は、このような大事な場所を守る役目がありました。もし、西日本から徳川幕府に反抗する人が出たときには、彦根で敵をむかえ討とうと考えていました。また、敵が京都にやってきたときには、琵琶湖を船で渡ってすぐにかけつけられるようにと、松原の港に船を準備していました。



しょう ぐん 将軍をささて

しん らい 将军からの信頼

直孝は、3代将軍徳川家光から信頼されていました。将軍が政治の大事な決断をするときに相談したのが直孝でした。この役割は、あの井伊家の人々にもうけ継がれ、のちに「大老」という役職になります。



直孝が家光からもらった手紙
直孝を信頼していると伝えます

ひこにやんのおとのさま

直孝は、いつでも将軍と相談できるようにと考え、彦根には戻りませんでした。そのかわりに、世田谷(今の東京都世田谷区)に領地をもらって、そこで時々休みの日をすごしました。世田谷の豪徳寺に、次のような言いつたえがあります。

一ある日、直孝が小さなお寺の前を通りかかると、猫に手招きされたので、中に入りました。するとつぜん雷雨となり、和尚さんと話をして雨やどりました。これをきっかけに、直孝は和尚さんと親しくなり、お寺はりっぱになりましたー

豪徳寺では、猫の手招きをきっかけにお寺が栄えたとして、福を招く「招き猫」の伝説がうまれました。ひこにやんは、この伝説がもとになってうまれたキャラクターです。



豪徳寺
お寺の一角に直孝のお墓もあります

あたら よ 新しい世にむけて

よ なか 直孝がめざした世の中

直孝は、みんなが安心して暮らせる世の中をつくりたいと考えました。そのころ、日本では戦争がなくなっていましたが、中国では戦争しており、日本に助けを求めてきました。しかし、直孝の反対で出兵しないことが決まりました。

この先200年以上平和な世の中が続きますが、そのもとには、豊かな社会を築きたいと願う直孝の思いがあったのです。



ゆい ごん 直孝の遺言—戦国の風習はやめよー

このころ、主君が死ぬと家来があとを追う「殉死」という風習がありました。戦いに負けると、主君といっしょに家来も死んだなごりです。

直孝は、殉死は平和な時代にふさわしくないと考え、死ぬ前に、殉死してはいけないと家来へ強く言い聞かせました。

殉死の禁止は、直孝の死後もなく幕府のきまりに取り入れられました。



井伊直政と直孝の生きた時代

井伊直政

年代	年齢	内 容
永禄4年(1561)	1	遠江国井伊谷(静岡県浜松市)で生まれる。父は井伊直親。
天正3年(1575)	15	徳川家康の家臣となる。
天正10年(1582)	22	武田家の家臣だった者たちを家来とする。
天正12年(1584)	24	小牧・長久手の戦いで、「井伊の赤備え」隊が活躍する。
天正18年(1590)	30	上野国箕輪(群馬県高崎市)に12万石を領し、箕輪城主となる。
慶長3年(1598)	38	城を箕輪から高崎に移し、高崎城主となる。
慶長5年(1600)	40	関ヶ原の合戦。徳川家康方が勝利する。
慶長7年(1602)	42	18万石に加増され、佐和山城主となる。
		佐和山城で死去する。

井伊直孝

天正18年(1590)	1	駿河国中里(静岡県焼津市)で生まれる。父は井伊直政。
慶長7年(1602)	13	父直政が死去する。
慶長8年(1603)	14	徳川秀忠の家臣となる。
		徳川家康、江戸幕府を開く。
慶長19年(1614)	25	大坂冬の陣に井伊家の大将として出陣する。
		陣の後、彦根藩主となり15万石の領地をおさめる。
慶長20年(1615)	26	大坂夏の陣。陣の後、恩賞として5万石が加増される。
		彦根城の工事を再開する。
元和8年(1622)	33	彦根城と城下町全体が完成する。
寛永9年(1632)	43	將軍徳川家光の相談役をつとめる。
万治2年(1659)	70	江戸で死去する。

※年齢は生まれた年を1才とかぞえる「かぞえ年」であらわしています

小学生用解説書 直政・直孝物語－彦根を築いた井伊のお殿様－

2009年3月発行

編集・発行 彦根城博物館 滋賀県彦根市金龜町1番1号

印刷 近江印刷株式会社

作画 堀口一(京都精華大学マンガ学部)